

知的障害特別支援学校に在籍する児童の居住地校交流に関する調査 －児童の保護者を対象に－

The Questionnaire Survey on the Individual Integration of Special School Children to Community Regular Schools

寺本一寿代※ 佐藤慎二

要旨：T特別支援学校小学部保護者に、居住地校交流についての意識調査を実施した。その結果、「地域の同世代の子どもたちに我が子のことを知ってほしい」等の保護者の居住地校交流に寄せる思いや期待と共に、「迷惑をかける」「パニックを起こすのでは…」等の不安な思いも把握された。居住地校交流の実践にあたっては、まず保護者のニーズを踏まえ、交流相手校との事前の連携（話し合い）を通して、児童に応じたきめ細かな配慮を講じることの重要性が示唆された。

Key Words：居住地校交流，知的障害特別支援学校，保護者，連携，共生社会

I はじめに

特別支援教育の柱の一つに「交流及び共同学習」がある。我が国や本県においては、近年「交流及び共同学習」を推進する法律や提案が多数出されている。「小学校学習指導要領解説総則編」（平成20年8月）には、「特別支援学校との交流の内容としては、例えば、学校行事や学習を中心に活動を共にする直接的な交流及び共同学習のほか、文通や作品の交換といった間接的な交流及び共同学習が考えられる」と記述された。また、近年、ノーマライゼーションという特別支援教育の目指すべき方向性や障害のある児童生徒や保護者のニーズに応じた特別支援教育の推進という視点から、居住地校交流の必要性が認識されつつある。埼玉県では、障害のある児童生徒や特別な教育的支援を必要としている児童生徒が、在籍する学校（学級）の他に、児童生徒の教育的ニーズに応じて居住地の学校（学級）で学習できるよう配慮する支援籍制度を行っている。また、千葉県内の特別支援学校小学部設置校33校のうち21校（63.6%）で居住地校交流を実施している。しかし、自校では、これまで居住地校交流を実施していないため、保護者が居住地校交流についてどのように考えているか、そのニーズは明らかにされてこなかった。また、居住地校交流に関する保護者のニーズに関する先行研究は、発表されていない。

そこで、本研究では、保護者を対象にして居住地校交流の意識調査を実施することで、居住地校交流の実践上の示唆を得ることを目的とする。

II 方法

1 調査対象

調査の範囲は、T特別支援学校小学部保護者73名とした。

※ 千葉県立つくし特別支援学校

2 調査方法

アンケートは、無記名も可とし、A4用紙表裏2ページで、その他自由記述を含む選択回答で構成した調査用紙を用意した。調査用紙をT特別支援学校小学部担任を通して、保護者への記入依頼をした。調査依頼から回収までの日数は約2週間とし、回収したアンケート用紙を集計分析の対象とした。

3 調査期間

平成20年6月～7月

4 回収率

71.2% (73名 配布 52家庭 回収)

5 調査項目

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 居住地校交流についてどう思うか | 2 居住地校交流を行いたいかどうか |
| 3 居住地校交流を行いたいと思わない理由 | 4 居住地校交流を行いたいと思う理由 |
| 5 居住地校交流を行う学級 | 6 居住地校交流を行う回数 |
| 7 居住地校交流を行う授業 | 8 居住地校交流を行う時間帯 |
| 9 居住地校交流を行ううえでの要望 | 10 居住地校交流実施時の送迎や付き添いの協力 |
| 11 交流相手校への情報開示や協力 | 12 居住地校交流についての不安や心配点 |

Ⅲ 結果と考察

1 居住地校交流についてどう思うか、3つの選択肢から当てはまるものを選択して回答を求めた。

「必要だと思う」50%、「あまり必要でない」13%であった。また、「よくわからない」約40%であったが、居住地校交流のイメージをもてない保護者も多かったものと思われる。

<意見> 自由記述

○「必要だと思う」

- ・通常学級の児童に接する機会がないため、地域の友達づくりや将来のため。
- ・兄弟の行っている学校や友達に理解してもらいたいと思うので。
- ・子どもの存在を知って、理解してもらうことは重要だから。
- ・前の学校では、月1程度学区の学校にも母と共に通っていたが、同学年の子どもたちも、学校外の子どもたちも声をかけてきてくれたり、障害についてもいろいろと質問したり、子どもたちにも何か影響を及ぼしたように思うので。

○「必要だと思うが・・・。」

- ・自校での学校生活に慣れ、本人の様子を見て交流出来たらと思う。しばらくは現在の生活を優先したい。
- ・学区の小学校には、姉も通っているので影響が心配。また、知的障害のある児童が在籍しているが、よく授業が滞る場面があり、周りの児童や親の理解を得る事は難しいと思う。

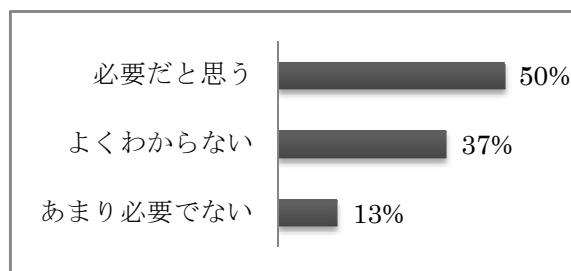


図1 居住校交流についてどう思うか

- ・現在の状態では、本人の負担になると思う。これからの成長していく過程で必要が出てくれば考えたいと思う。
- ・必要だと思うが親の負担がますます増えることが心配、サポート体制がない中では積極的になれない。
- ・基本的には必要なこと、理想的なだと思うが、現実的に自分の子どもで考えてみると、どうなんだろうと考えてしまう。

○「その他」

- ・できれば兄弟のいる学校に行かせたい。
- ・必要な子もいると思うが現在のような交流（学校間交流）で十分。
- ・特に障害のある子どもを受け入れることを難しく考えずに自然体で接してくれるのは子どものうちが良い。
- ・東京に住んでいる時は、副籍として近くの学校に登録できた。
- ・特別支援学級に行っていた事もあり、その学校では行っていた。通常学級の子ども達も楽しみにしていた。
- ・むしろ特別支援学校へ通常学校のお子さんが交流に来てほしいと思う。

○「あまり必要ない」「よくわからない」

- ・本人がまだ他人に興味のない様子でもあり、健常児側からしても少し障害児と触れ合ったところですぐに忘れてしまうだろうし、その場限りのような気がする。
- ・今のところこれは誰のための交流なのだろうか？と疑問がある、以前行われていた保育交流で誰にも相手にされない息子を見て悲しい気持ちになった。
- ・毎日一緒にいるから子どもたちが障害のある子の事も少しずつ理解していくものだと思うので、数回しか会わない障害の子が理解できるかが疑問。
- ・居住地校に迷惑をかけたり、お客様になってしまったりすると思う。
- ・居住地校交流はどういうものかイメージがわからない。
- ・いろいろお子さんがいて、うちの子をどう思うのか不安。
- ・子どものレベルによると思う。
- ・地域と交流というなら子ども同士と言うよりもまずは、その子達の親の理解が必要なではないか。

2 居住地校交流を行いたかどうか、2 択での回答を求めた。「はい」約 60%、「いいえ」約 40%であった。この結果から、保護者は、不安等はあるものの、この取組を評価し、行いたいと考えていることが分かった。

3 上記の設問に「いいえ」と答えた保護者に、その理由について 4 つの選択肢から当てはまるものを

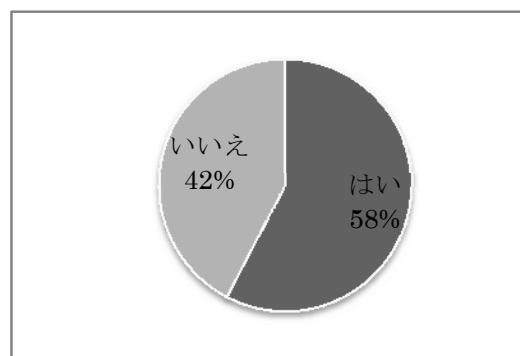


図2 居住地校交流行いたいかどうか

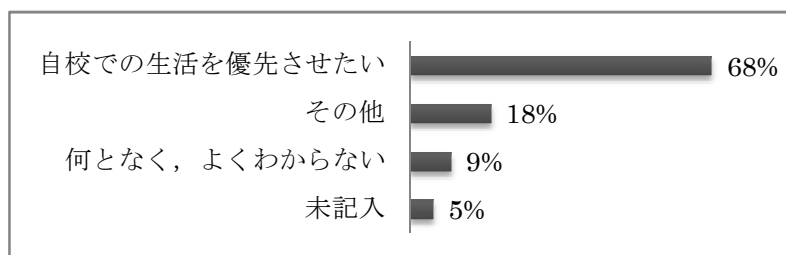


図3 居住地校交流を希望しない理由

選択しての回答を求めた。居住地校交流を行いたいと思わない理由としては、「自校での生活を優先させたい」が、約 70%を占めた。

<その他の意見>

- ・学校側の体制が整っていない状態で行かせても意味がない。
- ・以前、週 1 回保育交流に行っていたが、今一つ手応えをつかめなかった。みんなと同じことができればきっといいだろうと思うが。
- ・就学前に、月に一度保育園との交流があったが、あまりの差にショックを受けた。
- ・兄弟児がっらい思いをしそう。

4 先の 2 の設問で「はい」と回答した保護者に、その理由について 5 つの選択肢から当てはまるものに、優先順位をつけての回答を求めた。

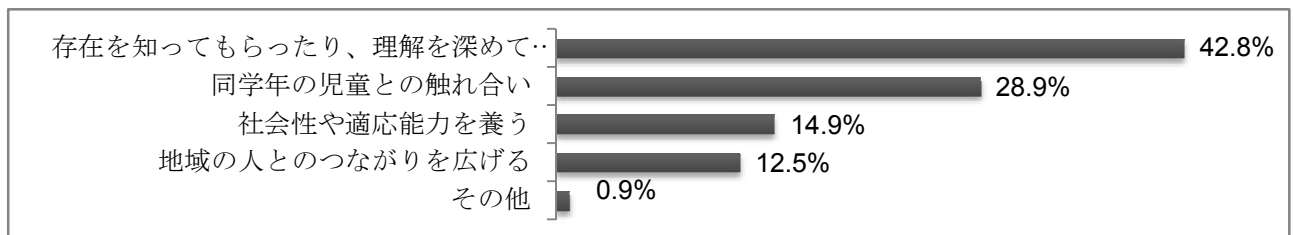


図 4 居住地校交流を行いたいと思う理由

保護者のニーズは、やはり、地域での子どもの理解「子どもの存在を知ってもらったり、理解を深めてもらったりする」であるということが明らかとなった。

5 居住地校交流を実施する際に適当と思われる学級について、3 つの選択肢から当てはまるものを選択しての回答を求めた。「通常学級」50%、「特別支援学級」「わからない」が、25%であった。これは、通常学級児童との触れ合いを通して存在を理解してもらったり、理解を深めてもらったりしたいという思いによるものであると考える。

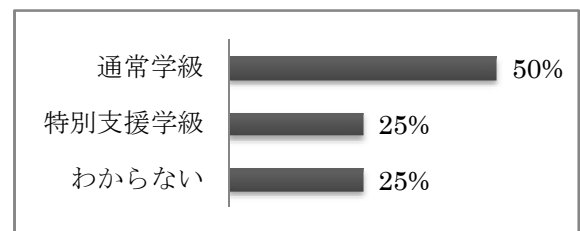


図 5 居住地校交流を行う学級

<理由>

○通常学級

- ・普通の子どもたちにも、生命の大切さを学んでほしい。
- ・3 月まで、保育園に通って折り（5 年間）健常児との交流が一般的であり、健常児のママが「〇〇くんがクラスにいるから、皆優しい子になったね。」と言ってくれたことが心に残っている。
- ・障害児を理解して、積極的に関わりを持ってくれると思う。
- ・特別支援学級では、今のクラスと変わらない。通常学級の子ども達に理解してもらわないと意味がない。

○どちらでも良い、わからない

- ・どちらも必要。知ってもらうためには通常学級だが、1 日中通常学級では子どもにとっても厳しいので、特別支援学級も必要。
- ・同学年の友だちと過ごす通常学級、障害児と過ごす支援学級どちらも違った良さがある。

- ・通常学級も特別支援学級も交流を行うことは良い事なので選べない。

○特別支援学級

- ・通常学級では周りの子どもに勉強の遅れが出るのでは。

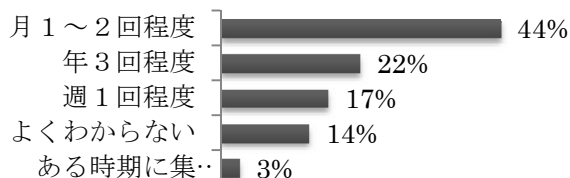


図6 居住地校交流を行う回数

6 居住地校交流を行う回数として適当

と思われるものについて、5つの選択肢から当てはまるものを選択しての回答を求めた。「月1～2回程度」約45%、次いで「年3回」約20%となった。「ある時期に集中して」は、わずか3%であった。

7 居住地校交流を行うのに適当と思われる授業について、お子さんの得意な活動を考え、その他を含む9つの選択肢から当てはまるものについて、複数回答を可として回答求めた。「音楽」「給食・昼休み・清掃」で約60%、次いで、「体育」、「図工」という結果であった。

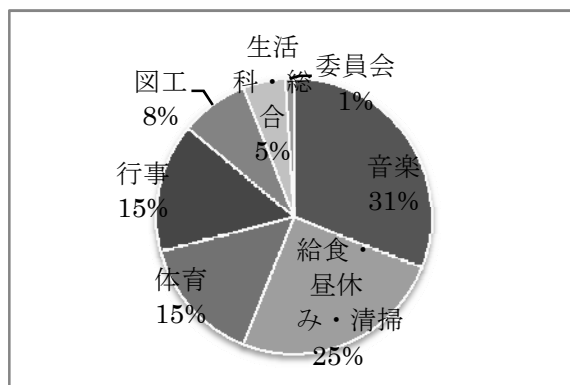


図7 居住地校交流を行う授業や活動

8 居住地校交流を行うのに適当と思われる時間帯について、5つの選択肢で回答求めた。図8のように、「午前中」約60%、「日中」、約20%、「午後」0%であった。

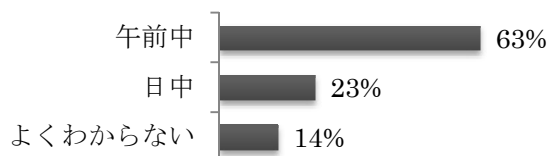


図8 居住地校交流を行う時間帯

9 居住地校交流を行ううえで、本校や交流校に要望したいことについて、その他を含む5つの選択肢から当てはまるものについて複数回答可として回答を求めた。

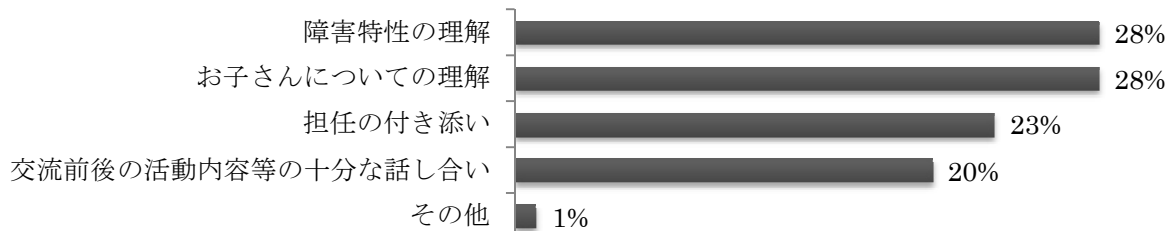


図9 居住地校交流を行う上での要望

「障害特性の配慮」「お子さんについての理解」「担任の付き添い」の順であり、実施に際しての保護者の不安な気持ちが伺われる。

10 居住地校交流を進めるにあたり、相手校への送迎や授業中の付き添いなどのご協力が可能かどうかについて、2つの選択肢で回答を求めた。

「はい」が約80%という結果となった。居住地校ということもあり、で実際に協力が可能ということ

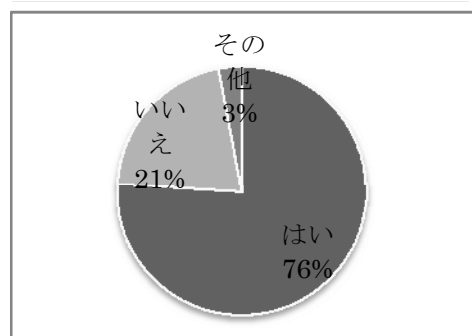


図10 送迎や付き添いの協力

が大きく関係していると思われる。また、保護者の居住地校交流への高い期待感の表れであると考え。

- 1 1 居住地校交流の事前の取り組みとして交流校を見学たり，交流内容について一緒に考えたりすること，お子にとってよりよい交流になるようお子さんの情報を交流校の関係者に伝えること等，いろいろな協力が可能かどうか，2 択で回答を求めた。「はい」約 80%，「いいえ」10%という結果であった。

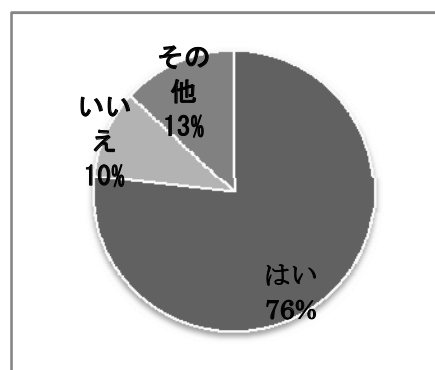


図 11 相手校への情報開示や協力

- 1 2 居住地校交流を行う場合に，お子さんの普段の様子から見て何か不安や心配な点があるかについて，自由記述で回答を求めた。
- ・見通しが立たないと泣き叫ぶため，初めての教室には，かなりの戸惑いがあると思う。何度か下見にいけると助かる。
 - ・他害行為，急に泣き出す，パニック，物を取る，奇声，こだわり等が心配。
 - ・慣れるのに，少し時間がかかる。
 - ・通常の時間の流れ等ががらりと変わる為，今現在の子どもの状態では負担。
 - ・妹が小学校にいる，以前クラスメイトから兄の事で，冷やかされたことがあるため通常学級には，あまり行かせたくないのが正直な気持ちですが，特別支援学級なら良いと思う。
 - ・最初は地元でなくても思いましたが，アンケートを書いているうちに，少しでも交流も必要なのではと思った。
 - ・居住地校側の児童にある程度の理解がないと無意味だと思う。

IV 総合考察

1 居住地校交流の取組全般について

保護者の半数は，居住地校交流を「必要な取組」だと答えた。「あまり必要でない」と答えた保護者の意見では，「迷惑をかけてしまう」「お客さまになってしまう」等の不安からくるものが多かった。また，約 60%の保護者が，居住地校交流を「行いたい」と答えた。一方、自校小学部教員に行った同内容のアンケート「知的障害特別支援学校に在籍する自閉症や自閉的傾向のある児童のよりよい居住地校交流について」では，「必要な取組」であるという回答が約 70%であった。しかし，自由記述からは，「必要であるが，子どもに応じた配慮が必要である」との指摘が多く，保護者同様の不安を抱えており，実施にあたっての十分な検討が求められる。

居住地校交流を「行いたくない」と答えた理由としては，「自校での生活を優先させたい」が約 70%を占めた。自校での生活に安心し満足していることが伺え，逆に，居住地校交流により生活が不安定になるかもしれない不安を抱えていることも示唆される。

2 居住地校交流の学級・回数・内容・時間帯について

交流相手学級としては，「地域の中での子どもの理解」を希望することか

ら、約 50%の保護者が「通常学級」を挙げているものと思われた。また、自校小学部教員に行ったアンケートでは、無理なく取り組めることや障害特性に応じた対応が可能であるという理由から、「特別支援学級」が約 40%であり、児童の実態に応じて「どちらでも良い」が約 35%という結果であった。「通常学級」という回答は、約 25%であり、保護者と教員の意識の違いが明らかとなった。

居住地校交流は、通常学級で取り組む中で、同学年の友達との触れ合いをもつというねらいがあるが、特別支援学級をリソースルーム的に活用する弾力的な発想も検討されてよいと思われる。また、実施前の保護者の意思の確認と共に、相手校へ保護者の思いを伝えていくことが求められよう。

居住地校交流の回数としては、44%の保護者が「月 1 ～ 2 回程度」と回答し、できるだけ多く実施したいという思いが伺えた。設問 9 や 1 2 の自由記述にも示されていたように、数回では児童が見通しをもてず混乱する等し、実施する意味が薄れることを危惧しているものと思われる。

居住地校交流で行う教科や活動としては、「音楽」が最も多く、続いて「給食・昼休み・清掃」「体育」「図工」の順となった。これらの活動を得意とする児童も多く、無理なく参加できると考えていることが伺える。また、時間帯としては、「午前中」約 60%であり、午後の場合は、集中力が切れてしまうことに不安を抱いていることが示唆された。“いい姿で交流してほしい”という保護者の気持ちが伺える。

3 居住地校交流を行ううえでの要望・送迎や付き添いについて

居住地校交流を行ううえでの要望としては、「障害特性の理解」、「お子さんについての理解」、「担任の付き添い」の順となった。相手校への送迎や付き添いについて、80%の保護者が「可能である」と答えてはいるものの、やはり、「担任の付き添い」を希望していることが明らかとなった。これは、保護者の負担感のみならず、不安の表れとも受け取れる。

自校小学部教員に行ったアンケートの、保護者の付き添いについてどう思うかの回答では、「妥当だと思う」が約 50%を占めた。しかし、「ボランティアやサポート教員による支援が必要」「教員やコーディネーターが付き添った方がいい」の回答を合わせると、約 40%を占め、付き添いについては、保護者任せにせず、自校教員もかかわっていくことが必要であると考えていることが伺えた。

4 居住地校交流の取組への協力

事前の取組である、「見学」「交流内容についての話し合い」「相手校への情報開示」等について、約 80%が可能であると答えた。保護者は、この取組に大変協力的であり、情報を開示していくことも厭わないと考えていることが明らかとなった。保護者は居住地域で子どもの様子や子育てについて誤解されることも多く、情報開示してでも、地域の中で我が子を理解してほしいという強い期待を抱いているものと思われる。

5 居住地校交流を行うにあたっての不安や心配な点について

「泣き叫ぶ」「パニック」「多動」「慣れるのに時間がかかる」「環境の変化に慣れない」「他害」などといった、自閉症や自閉的傾向のあるお子さんについて見られる不適応行動等が多く挙げられた。やはり、居住地校交流を進めていくうえにおいては、これらの点への配慮が不可欠であるということ、また、単一の知的障害のある児童に比べ、自閉症や自閉的傾向のある児童の実践において、個に応じた配慮がとりわけ必要であることが示唆された。

以上のように、居住地校交流への保護者の複雑な思いが明らかになった。また、教員に対するアンケートとクロスさせる形での考察にもみられるように、教員が保護者のニーズを十分把握・調整することが大きな前提となろう。さらに、本調査では対象となっていなかったが、相手校との連携は必須の要件となろう。先に小察したように、特別支援学級のリソースルーム的運用も含め、児童に適した内容の選択、児童の障害特性に応じた必要な配慮を講じていくことで、児童にとってよりよい交流となるよう、事前のきめ細かな準備が何よりも大切であると思われる。このような事前の配慮が児童のよりよい交流を実現するだけでなく、保護者の不安をも軽減することになろう。

居住地校交流そのものはまだ緒に就いたばかりの取組ではあるが、「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会」（文部科学省平成19年4月）の実現のためにも、今後、当たり前のこととして居住地校交流が展開され、継続されることが強く望まれる。

※本研究は、平成20年度千葉県教育委員会長期研究生として取り組んだ研究をもとに加筆したものである。

<参考文献>

- 1) 全国特別支援教育推進連盟(2007):「交流及び共同学習事例集」ジエース教育新社
- 2) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所(2006):「交流及び共同学習に関する調査」
- 3) 大南英明(2008):「交流及び共同学習への取り組み」,特別支援教育の展開2巻,明治図書